砺波カイニョ倶楽部会報73号
平成 25 年 11 月発行　発行者　砺波カイニョ倶楽部　代表幹事　柏樹直樹
事務局　富山県砺波市表町 14-10　電話　0763－33－6588　　天野一男建築工房内

能登の屋敷林と歴史にふれる

10 月 19 日（土）、能登の屋敷林と歴史にふれる集いを行った。終日おだやかな日和で 22 名の参加者は楽しく交流・見分を深めた。見学場所は、宝達志水町の喜多家と岡部家、羽咋市の永光寺の三ケ所。①いずれも樹木につつまれている。②深い歴史をもっている。③喜多家では、当主のお話、岡部家では町職員の説明、永光寺は方丈様の法話を聞き、現地の空気にゆっくりふれる小さな旅をつくった。帰りに氷見の「番屋街」で足湯や、買い物や、コーヒーとそれぞれ楽しんだ。

森の中の喜多家・国指定重要文化財

Ⅰ　屋敷林の特徴

全敷地面積 7,000 坪で、ほぼ正方形、表門、主屋は真東を向き、敷地中心部に配置。屋敷の東入口に立つと主屋の棟は目の高さにあり、下り勾配の通路約 40m樹林の中をくぐりすり鉢の底におちつく。主屋の東面と南面は敷地が高くなっていて、西面から北面へ屋敷の排水路が通じる。西が海。倉から米を運べるようになっていた。屋敷の全面は、樹木が茂り、外からは家屋は見えない。高木は、スダジイ、モミ、スギ、エノキ、アテ、中低木のツバキ、カエデ、ハクモクレンが多数あり、下層にはツツジ、ヒサカキ、アセビが入る。北面にタケが繁茂する。旧家のおもかげをスダジイの古木が数本南面に象徴として見られた。主屋に入ると全く外部の音は聞こえず、幽玄の空間である。外からはまるで森である。

Ⅱ　建造物

十村役門（鎌倉時代の建物で 400 年前に移築。安宅の関の部材）が正面に。主屋はアズマダチ、二階なし。1718 年新築。部屋数 15 部屋、坪数 170 坪。正面には上から大式台、小式台、表玄関、内玄関と格式をもってつくられる。殿様の座敷の全ては釣り天井・梁に忍び返しが（くせ者の侵入を防ぐため）。座敷の部材は、きわめて質素。欄間も天井もシンプル。主屋の北西側に道具倉、味噌倉が配置。

Ⅲ　喜多家の由緒

源氏の新田義貞の流れをくむ。伊予国・喜多郡から能登に移住（1638 年）。新田開発や商業活動を盛んにおこない、1814 年、所持高 2,305 石の大地主に。十村役は七代目市十郎から三代にわたり勤めた。北前船とのつながりもあり、新しい文化も入る。「道中湯沸し旅箪笥」という珍宝もある、今言葉でいうとピクニックセットである。

Ⅳ　喜多家の当主のお話と案内に酔う

加賀藩の特殊な役所としての位置づけ。徳川家からにらまれてはならず、建物、人の配置で非常に質素によそおった。低いアヅマダチ、同時に上手な年貢の取り立てを続けるため十村制度をとり、色んな農民の不満を受けとめ、対処し、直接、藩に立ち向かうことをおさめる役として、特別の任を果たした。

年に何度か殿様が訪ねるため、それを受け入れる間や格式が建物に残る。三段になっている間どり、座敷以外には天井はない。行事をとりおこなう中心になる広間は 6 本の大柱でとおし柱となって家全体を支える。別棟の資料館には、文書や家宝が並べられ、喜多家の歴史と交流の広さを知ることができる。

加賀から能登への要となる位置で、200 近い十村役のまとめ役でもあった。今残っている道具倉、味噌倉も古いものだ。山岡鉄舟の書や焼物、兵器が飾られる。当主の話し方、強弱、おとし、ジョークとすっかり一時間で酔ってしまった。

喜多家正面より（玄関　式台４カ所あり）

当主の「道中湯沸し旅箪笥」の説明

山の直下の岡部家・石川県指定有形文化財

家の背後は山で、前側は開けた水田の続く岡部家は 18 代続いた旧家であり、長年十村役を勤めてきた。寄贈され、宝達志水町は 3 年かけ全面改修し町文化財として留守役をおき管理している。

□　岡部家の屋敷林

建物をつつむように山が背後にせまる。南面は平野で家は南向きに建つ。正面に立つと、右側（東面）にスギ、スダジイ、カエデ、ラカンマキがみられる。後方（北側）は、スギ、アテを中心にした人工林の山。左側（西面）もコナラ、スギの混成林。2 棟ある倉の奥部の屋根に 9/16 豪雨で山崩れ倒木したスギ 3 本がかかっていた。前庭には僅かに小木が配置されている。内庭は、座敷東側の山を借景に造られ、石と小さな「心」字池が配される。上木のスダジイが歴史と庭全体の厚さを演ずる。

岡部家前での集合写真

古刹　永光寺の樹叢

700 年の古刹・永光寺のどっしりまとまった伽藍をつつむ樹叢と深いまわりの山々65ha が屏風のように重なる。平成 7 年から約 10 年・11 億円をかけ、平成の大改修が行われ、すっきりひきしまった法堂の中で、屋敷智乗老師のお話を聞く。

Ⅰ　お話の要旨

・開祖瑩山禅師で（1313 年）室町時代には朝廷とも深く結びつき、天皇の勅願寺となり、能登での中心寺院として全国の曹洞宗（15,000 ケ寺）の根本道場であった。
・応仁 2 年（1468 年）兵火で焼失・再興後、天正 7 年（1579 年）再び焦土と化した。
・江戸時代前期に方丈が新築・庫裡修理、それに法堂、鐘楼が改修された。
・江戸時代後期　加賀藩の検地の時、寺は無住であったため、藩は寄進した寺領を取りあげ、維持費程度の看坊料 20 石だけ認めた。そのため寺としての運営ができなくなった。荒れ放題となった永光寺は総持寺の末寺に組み込まれた。
・明治以降も益々、伽藍の老朽化が進み、平成 3 年の台風 19 号で大被害を受けた。
・平成 7 年から約 11 億円かけ、平成の大改修が行われ、道元禅師 750 回忌が催された。
・明治時代、山岡鉄舟が再建に協力した。本堂の 8 枚の襖絵は山岡鉄舟の書で最高傑作。
・本像の釈迦如来はマゲを結んでいる。鎌倉時代の院派の仏師による作品。
・本堂の下に蛇胎石があり、頭が前庭に、尾が本堂裏に顔を出していると伝えられている。

Ⅱ　樹叢の重みと疑問

堂棟をつつむ敷地の樹木はスギ、ケヤキ、スダジイで見事な樹勢を見せる。正門石段のまわりのスギ、モミ、アテも壮年期のただよいを呈し、下木にカエデが入る。その樹叢を取り巻く 65ha の山々はスギを主体とした人工林である（永光寺敷地）700 年を重ねた古刹にしては樹木があまりにも若々しい。その疑問に老師は寺の維持が困難で明治期には什器や陶器、書の寺宝を処分し、樹木も伐採しつくした。古木の見られない原因が理解できた。今の樹木で古いもので 150 年生程度ということになる。

Ⅲ　書院で一服

お話を聞き、本堂の仏像の案内のあと、書院に招かれお茶を一服いただきくつろぐ。秋の小さな風がほほをなでた。

大変丁寧に迎え、案内下さった法丈様に一同感謝の心を残し帰路についた。

赤い毛氈の上でお茶を一服

―　参加者の一言感想　―

・誘ってもらってよかった　・一人では行けない所を見せてもらった　・木と家と歴史にふれる旅だった　・喜多家の維持は大変だろう　・みんな丁寧に説明され、気持ちよかった
・能登は古い中味のあるところだ　・もっと会員も参加すると楽しくなる　・会費のもとは取れた　・岡部家に寄らず、渚ドライブを入れてほしかった　・永光寺で昼を食べられたらよかった